

第10回

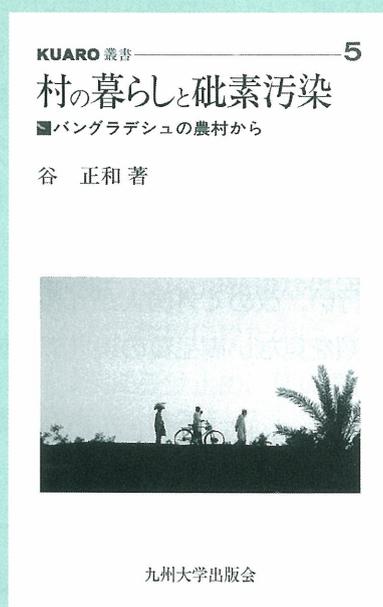
「国際開発研究 大来賞」

決定

主催：財団法人 国際開発高等教育機構 (FASID)

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた大来佐武郎先生を記念して平成9年に創設されました。

第10回の受賞作品が下記の通り決定いたしましたのでご紹介します。



谷 正和 著
『村の暮らしと砒素汚染 —バングラデシュの農村から』

(九州大学出版会)

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
- 原洋之介著『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
- 深川由起子著『韓国・先進国経済論—成熟過程のミクロ分析—』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣 1999年
- 辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合—構造調整政策下における役割と育成—』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯陽一著『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
- 西川潤著『人間のための経済学—開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
- 脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
- 安原毅著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年

谷 正和 著『村の暮らしと砒素汚染 ーバングラデシュの農村から』

(九州大学出版会)

審査委員選評

本書は多くの人びとに砒素汚染の恐ろしさを知ってもらう啓発的な教科書であるとともに、砒素汚染を防止するための外国援助者にとっても「援助する意味」を考えるうえで参考になる実践の書だといえる。

著者の谷正和助教授（九州大学大学院）は94年に発足したNGOアジア砒素ネットワークと行動を共にしながらバングラデシュ、ネパールの現場で人類学的調査を行い、本書ではバングラデシュのシャタム村とアルマ村に入り、人類学的な角度から村社会の仕組み、そこに住む伝統的な村人たちの深層心理に分析の目を向けながら得た新しい知的発見と援助する者への教訓を収めている。

本書の特色を挙げると、第1に、深刻な砒素中毒汚染をバングラデシュの二つの農村から訴え、貧しさゆえの問題の複雑さ、そして根深さを日本の多くの人びとに知ってもらおうという意図をもって筆をとっていること。審査では、文献レビューや論理性の不足が指摘されたが、著者が最初から学術的探求でなく、学者の目で捉えた現実からの生きた情報を少し加工して一般大衆に“啓発の教科書”として発信しようという執筆意図を勘案して「大来賞」に値するものと判断した。

第2に、貧しい農村での砒素汚染を人類学、環境人類学というジャンルから捉えていることである。通常、砒素といえば薬学など医学部門が登場したり、農村開発といえば経済学や社会学などからのアプローチが主流を占めている。その意味で、本書の環境人類学というアプローチに新鮮さを感じる。冷徹な目で農村の歴史のなかに閉じ込められたような人間を鋭く観察する。そのうえで対応を考えようとする。

第3に、現場体験による人類学的な視点で村と人間分析を行い、改めて外国人が「援助する」という意味を問うていることである。これをODA開発調査からみると、他に類を見ない高品質の現地調査報告書ともいえる。

(荒木 光弥 国際開発ジャーナル主幹)

第10回応募作品の傾向と選考経緯

2005年4月から2006年3月までに出版された開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書（但し翻訳は含まず）を対象として公募したところ、37件の応募があった。作品のテーマは、開発経済の視点から開発途上国を研究したものが14件、経済（企業・経営・金融論など）を中心に扱ったものが7件、社会・環境人類学の視点から開発途上国を研究したものが6件、国際協力一般（NGO・援助論など）を扱ったものが5件、国際関係・政治を中心に扱ったものが3件、その他が2件であった。

当財団内部で予備審査を行った結果、受賞作品に加え、下記3件が最終審査に残った。

青山和佳著 『貧困の民族誌ーフィリピン・ダバオ市のサマの生活ー』

東京大学出版会

小浜裕久著 『日本の国際貢献』 勁草書房

白井早由里著 『マクロ開発経済学』 有斐閣

最終審査で委員から出された意見はおおよそ以下のとおりである。青山氏の作品は、長期にわたる丹念な現地観察に基づいて、少数民族の生活様式、社会行動を開発経済学の分析対象としようとした試みが評価できる。特に、少数民族の貧困削減という形で包括的な施策を提供しようとしており、支援策の立案・設計に当たっても参

考となる。小浜氏の作品は、日本の国際貢献を単にODAのみに限定せず、最近国際的にあるいは日本で議論されているトピックスー国際貢献度指数、政策の一貫性、MDGs、国連PKOなどーを広くカバーしており、国際開発・開発援助政策について興味深い示唆を多数提示している。白井氏の作品は、既存の開発経済理論や開発援助に関する議論が体系的にまとめられており、大学や大学院教育での有用性が非常に高い。

今回の受賞作品、『村の暮らしと砒素汚染ーバングラデシュの農村から』は、砒素中毒対策のパイロット・プロジェクトの形成から実施までを、調査に基づく地図・図表を用いて平明に解説しており、地下水汚染問題の深刻さの理解に大きく貢献している。また、砒素汚染という切り口からバングラデシュの経済社会構造、援助のあり方といった問題を立体的に説明しており、単なる科学的・技術的な対策だけでは解決できない開発問題の複雑さを提示している。今後、このような現場と研究との協力が活発に行われることによって、開発援助に貢献する学者が多く出てくることを期待したい。

受賞者の言葉

「望外の」という言葉がありますが、この言葉はこのようなことのためにあるのだ、ということ、受賞のお知らせを頂きつくづく思いました。審査員、関係者の皆様方に深くお礼を申し上げます。

アジアの砒素問題の解決に向けて活動する（特活）アジア砒素ネットワークの方々にはきっかりと頂き、1998年にバングラデシュの村へ行って以来、そこで人々の暮らしについて、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしてきました。本書は、その経験に基づき、村の暮らしの視点から見た砒素汚染を描こうとしたものです。この発想の原点は、私がはじめて村へ行ったときに受けた意外な感じに遡ります。日本では、人々が悲惨な生活を送っている砒素汚染の村というイメージでした。しかし、実際に見たのは、のどかな田園風景と好奇心満々の人たちでした。もうひとつ意外だったのは、砒素汚染を深刻に受け止め、使命感に燃えていた日本人に比べて、現地の人たちは拍子抜けするほど砒素汚染に危機感を持っていないことでした。このようなことから、現地の人々の視点で、砒素汚染を考えてみることにしました。もちろん、村の人の視点がそのまま表現できているはずはないのですが、その私なりの解釈を試みてみました。

開発援助は異なる価値観や習慣を持つ異なる文化が会合う場です。この出会いが衝突になるか協力になるかは、お互いが自分をどれだけ相対化できるか、どれだけ自分にとって「ふつう」でない考え方を理解しようと努めるか、にかかっていると思います。私の尊敬する人類学者のC. ギャーツは、異なる文化で起こる訳の分からないことの「訳の分からなさ」を、どれだけ「訳の分かる」こと、つまり、その文化では「ふつう」のこととして説明することが文化の研究の目的だと言っています。これからも、この受賞を励みにして、複眼的な視点で文化的行為としての国際開発を研究していきたいと思っています。

(谷 正和)



著者略歴

谷 正和 1957年生まれ。1991年アリゾナ大学大学院人類学研究科博士課程修了。アリゾナ大学応用人類学研究所研究員、宮崎国際大学比較文化学部助教授、九州芸術工科大学芸術工学部助教授を経て、2004年より九州大学大学院芸術工学研究院助教授。

主要著書 『民族考古学序説』（共著、1998年、同成社）
『Anthropology of Consumer Behavior』（共著、1995年、Sage University Press）
『Kalinga Ethnoarchaeology』（共著、1994年、Smithsonian Institution Press）

表彰式および記念講演会

表彰式および記念講演会

日 時 2006年12月7日(木) 午後3時から

場 所 財団法人国際開発高等教育機構 研修室

参加費 無料

申し込み お名前、ご所属先名、電話番号、E-mailを添えて下記お問合せ先までご連絡ください。

FASID

審査委員会

●審査委員長●

柳 健一 FASID理事長

●審査委員●

浅沼 信爾 (一橋大学国際・公共政策大学院客員教授)、荒木 光弥 (国際開発ジャーナル社代表取締役)、
大来 洋一 (政策研究大学院大学教授)、河野 善彦 (笹川平和財団常務理事)、
廣野 良吉 (成蹊大学名誉教授)、角崎 利夫 (FASID専務理事)、
大塚 啓二郎 (FASID連携大学院プログラムディレクター)、
湊 直信 (FASID国際開発研究センター所長代行)

●お問い合わせ先●

FASID

(財)国際開発高等教育機構 国際開発研究センター 安達・村田

〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-17 千代田会館5階

TEL : 03-5226-0306 FAX : 03-5226-0023 URL <http://www.fasid.or.jp> E-mail: okita2006@fasid.or.jp